

アコと人生…この人にインタビュー《第9回＝最終回＝》「中村 健さん」

—承前—

私がアコーディオンと出会ったのは昭和12～3年頃、中学3年～4年頃だったと思います。当時演奏会に行つて聴いた記憶はありませんが、偶々ラジオで聴いたアコーディオンの軽快な演奏に魅せられて、親に無理を言つてヤマハだったかトンボだったか忘れませんが、ピアノ式のものを買つてもらつて大喜びしました。

《旧制高校に入学の頃》

昭和15年に東京高等農林学校（現東京農工大学）獣医学科に入学しました。その翌年の秋に文化祭が開かれ、私は講堂で「アルフォンゾ」という曲を独奏しました。（その年の12月に日本はあの無謀な戦争に突入しました。）

昭和16年12月に戦争が始まつて、翌17年9月には高等農林学校も繰り上げ卒業で、9月には軍に徴兵される予定でした。私は兵役に駆り出されたら生きては帰られないだろう、とかねがね考へておりました。

そこで徴兵を延期するには理科系の大学に進学するより他に方法がなかつたので、色々調べて京都帝国大学（現京都大学）農学部林学科を受験することになりました。後で分かつたことですが、同じ農学部でも学科によつて徴兵の延期される学科と延期されない学科がありました。

私が進学した林学科は徴兵延期の制度が適用されておりました。その大きな理由は、当時木材が日本の飛行機の製造と深い関わり合があつたからです。

当時、日本の飛行機は木製で、プロペラは勿論、機体も木製でしたし、最も重要な飛行機の燃料は赤松材の根から採取されておりました。根を掘り出して蒸し焼きにし（乾留して）、軽油を採取してそれを飛行機の燃料にしておいたのでした。

そんな訳で昭和17年10月に大学に進学して1年位は普通に講義を受けておりましたが、授業中に空襲警報が発令されるようになり、

徴兵される教官や学生も次第に多くなつていきました。

昭和19年には、徴兵延期されておいた私達学生も学徒勤労動員という制度のもとに、当時の国有林へ飛行機の燃料採取のもととなる赤松材の材積を調査するため営林署へ派遣されるようになりました。

アコーディオンを弾いて楽しむご時世ではなくなつてしまつたので、習いはじめて6～7年後に中断を余儀なくされてしまいました。

昭和19年の春から半年位、広島営林署へ派遣されて、毎日山の中で大きな赤松の直径や高さを測つて、飛行機の燃料となる松根油の量を推定する仕事をしていました。

翌年は滋賀県大津営林署で、海軍の兵隊と一緒にこの仕事をしていましたが、もしこの年に広島に行つていたら原爆の被害にあつてたかも知れません。（原爆の被害で営林署長も、宿泊していた宿の女将も亡くなくなつてしまいました。）広島営林署でも食糧不足で、食べ盛りの私達は随分苦労しました。

《アコーディオンとの再会》

再びアコーディオンを弾き始めたキッカケですが私の場合、家庭環境と関係があるように思われます。私は昭和27年から40年以上信州伊那市に居住しており、仕事や趣味の関係で山へ出かけることが多く、また、近所の空き地を利用しての畑仕事をする機会も多く、若い頃は登山、スキー、乗馬など、屋内よりも屋外での活動時間が多かつたため、アコーディオンには拘わる余裕もありませんでした。しかし、年齢を重ねて足腰が弱くなつて、動的レクリエーションが出来なくなつた現在、家の中で静かに生活することを考えた場合まず思い浮かぶのは、昔親しんだハーモニカなどの楽器です。その中でもアコーディオンの魅力が再び蘇つてきた次第です。

《叔父が教えてくれたハーモニカが、後に役立つことになる》

もう一つ家庭環境との関係として、私の幼少の時代、今の核家族と違って両親をはじめ祖母、叔父、叔母と一緒に生活しておりました。祖父母や両親は邦楽が趣味でしたが、叔父や叔母は洋楽が趣味で私が子どもの時分、フランスやイタリアの民謡などをよく歌っていました。

叔父はハーモニカが得意で私にも教えてく



れました。このハーモニカが後日ダイアトニックアコーディオンの演奏にとっても役立つとは当時は全く知る由もありませんでした。[ダイアトニック式は押し引き（ハーモニカは吹くと吸う）で音が異なるもので、ハーモニカとボタン式ダイアトニックアコーディオンは機能が同じでとても弾きやすいと感じました。]

冒頭で書いたように旧制中学 3~4 年の頃だったと思いますが、ラジオか何かで聴いたアコーディオンの音色がとても素晴らしく、急に欲しくなって親にせがんで買ってもらったのはピアノ式のものでした。当時は年も若いし手もよく動いたし重さも感じませんでしたが、90 才近い現状では軽くて扱いやすいボタン式のダイアトニックアコーディオンが一番使い易いと思っております。

《ダイアトニックアコーディオンとの出会い》

ダイアトニックアコーディオンとの出会いです。ダイアトニックはヨーロッパが主流で、私の若い頃には日本のアコーディオンはピアノ式が主流でした。

私は、アコーディオンといえばピアノ式のものと思い込んでおりました。ところが最近、（今から 3~4 年前）ふとしたご縁（印刷物か何かの宣伝）で、千代田区神田駿河台谷口ビル 4 階の谷口楽器という会社がアコーディオンを専門に扱う楽器店であることを知り、訪ねてみました。

数多くのアコーディオンの陳列の中にボタン式のダイアトニックアコーディオンが目に入りました。早速試しに弾かせて貰いましたが音色といい、扱いや弾き心地といい申し分なく

値段もお手ごろで、早速購入の手続きを済ませました。

ハーモニカをやっていたせいか手が自然に動いて、そんなに苦勞せずに弾くことが出来ました。私の場合、軽くて持ち運びの便利な小型のボタン式ダイアトニックが一番使い易く、便利であると思います。 =終わり=

《寄稿者の近況紹介》

第 9 回連載中、寄稿者中村健氏よりお手紙が届きました。中村氏の近況を皆様にお知らせして「中村健氏」の項を終わりいたします。

□（以下手紙より転記）私、「アコと人生」と題して実行委員会ニュースに掲載させていただきました中村でございます。

昨年「第 21 回関東アコーディオン演奏交流会独奏部門（シニアの部）」に出演したのが縁で、送っていただいた会報を通じていろいろな楽しい情報を知ることが出来て嬉しく思っております。また、来年独奏部門で演奏いたしますのを楽しみに準備しております。素人の作品で申し訳ありませんが、曲目の一つとして私の作詞・作曲した「若き日の思い出」を演奏するのを楽しみにしております。



♪デイケアサービスへ出かけて♪

私事ですが、最近週に一度、「コスモス」というデイケアサービス施設へ出かけて、色々な体力維持の指導を受けたり軽い体操や足のマッサージをしてもらったりする他、アコーディオンを持参して大正琴やオカリナと合奏したり、皆と一緒に歌を歌ったりアコーディオンを通じて楽しい地域の活動を満喫しております。

それと、月に 1~2 度デイケアサービスセンターに隣接する宿泊施設を利用して滞在しており、昨日は、お年寄りの前で昔懐かしい日本の童謡を演奏しましたら「有難う有難う・・・」と涙を零して感激してくれました。

今後もこの楽器を通じてお年寄りの心を癒したり、自分自身の心の慰めとなればと願っております。（3月8日・中村健）《文責：乙津》